

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：34310

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25570016

研究課題名(和文) クィア・LGBT映画祭とオルタナティブなコミュニティの生成

研究課題名(英文) Queer and LGBT Film Festivals and the Formation of Alternative Communities

研究代表者

菅野 優香 (Kanno, Yuka)

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・准教授

研究者番号：30623756

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：3年間にわたる本研究期間中、国内では、計7のクィア・LGBT映画祭、国外では、計3の映画祭を訪れ、プログラミングや運営組織の成り立ち、地域社会との連携のあり方などについて調査を行った。最終年度には、国内外のクィア・LGBT映画祭運営組織、プログラマー、研究者を招聘しての国際ワークショップを開催し、とりわけ地方都市における映画祭の現状、運営上の戦略や継続的開催の困難などについて率直で有意義な議論を交わすことができた。

研究成果の概要(英文)：During the three-year period of my project, I participated in seven queer and LGBT film festivals in Japan, as well as three film festivals in Korea and Taiwan in order to research mainly the following: the programming process, the organizational structure and operation of each film festival, and the collaboration between the film festival organizers and the local communities. In the final year of 2016, I invited festival organizers, programmers, and film festival researchers for an international workshop in which we had frank and meaningful discussion on the status quo of film festivals, particularly in non-metropolitan areas, organizational strategies, and the issues facing stable and continuous festival runs.

研究分野：視覚文化研究

キーワード：クィア LGBT 映画 映画祭 コミュニティ アクティビズム

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当時、従来の映画研究の枠組みにおいて「映画祭」研究は周縁的な分野にほかならず、その理論や歴史、実践については体系的な学術研究が存在してはいなかった。近年、北米およびヨーロッパを中心に、映画祭をめぐる研究が急速に発展し、関連研究書が続々と刊行されてはいるものの、映画祭研究はまだ始まったばかりである。映画祭について本格的な研究が開始されたのは1990年に入ってからであるが、最も初期の論考としては、ビル・ニコラス「後期資本主義時代におけるグローバルなイメージの消費」(Bill Nicholas, "Global Image Consumption in the Age of Late Capitalism" [1994])がある。だが、映画祭の意義や機能が理論的かつ歴史的に説得力を持って論じられるようになるには、トーマス・エルセッサーによる論文「映画祭ネットワーク：ヨーロッパにおける新たなトポグラフィー」(Thomas Elsaesser, "Film Festival Networks: The New Topographies of Cinema in Europe" [2005])を待たねばならなかった。現在の映画祭研究における基本文献ともいえる論文において、エルセッサーはポスト「ナショナル・シネマ」という観点から、ヨーロッパの国際映画祭に、ハリウッドの覇権に対抗するような新たな映画文化創造の契機を見出していた。エルセッサー論文は、ヨーロッパという地政学的条件において映画祭がもつ意味について論じたものであるが、東アジアもまた香港国際映画祭や釜山国際映画祭などの成功によって、「トランスナショナル」な映画文化の実験場となっていることが指摘されていた(Soojeong Ahn, *The Pusan International Film Festival, South Korean Cinema and Globalization*, 2011)。その後、クィア・LGBT映画祭に焦点を当てた研究も少しずつ登場してきたものの、日本を含む東アジアのクィア・LGBTに関する研究はまだ未発展である。香港とソウルのクィア・

LGBT映画祭を分析した論文がわずかに存在するが(Hongwei Bao, "Enlightenment Space, Affective Space: Travelling Queer Film Festivals in China" [2010]; Kim Jeongmin, "Queer Cultural Movements and Local Counterpublics of Sexuality: A Case of Seoul Queer Films and Videos Festival" [2007])、これらの論文では、映画祭が性的マイノリティのアイデンティティやコミュニティ形成に果たす役割についての考察が十分とは言えなかった。

したがって、本研究は、映画祭と性的マイノリティとの関係をより深く掘り下げて論証し、クィア及びLGBT映画祭が果たす社会的機能を明らかにすることを目的として開始された。それと同時に、クィアおよびLGBT映画祭が文化的イベントであると同時に政治的、社会的運動であると仮定し、「メディア・アクティヴィズム」として概念化することを試みるものであった。メディア・アクティヴィズムという視座によって申請者は、映画祭というメディアが生み出すオルタナティブな共同体の生成と地域との連帯について、学際的かつ総合的に考察する研究を遂行したいと考えた。オルタナティブな共同体とは、これまでの当事者中心主義の場から、非当事者をも包摂する開かれた空間である。このように、映画祭を文化的実践であるだけでなく、新たなアクティヴィズムのあり方を示唆する社会的実践として捉えようとしたのが本研究の背景であった。

また、日本を始めとする東アジアのクィアおよびLGBTのアクティヴィストたちが映画祭に力を入れる理由についても本研究は大きな関心を寄せた。とりわけ地方のLGBTアクティヴィストにとって映画祭は、アクティヴィズムの核ともいべきものをなしており、次々と映画祭が立ち上がっている現状がある。(2015年には、名古屋で初のLGBT映画祭を銘打った「大須にじいる映画祭」がスタートし、今年の秋には、博多でも新たな

映画祭が始まる。)日本における LGBT 映画祭増加の理由のひとつには、欧米とは異なるコミュニティ生成や運営のあり方、ラディカルさや進歩主義によって特徴づけられるのとは違ったかたちでの性的マイノリティの新たなアクティヴィズムの可能性が秘められているのではないだろうか。例えばアジアン・クィア映画祭のような、アジアのクィア系映画のみを扱う映画祭の開催によって、東アジア横断的な性的マイノリティのネットワークが構築されつつあり、こうした動きはこれまでにないようなクィアおよび LGBT の連帯を予見させる。以上に述べたことが、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

1977 年、サンフランシスコで初めて性的マイノリティのための映画祭が開催されて以来、現在では世界中で少なくとも 200 以上ものクィアおよび LGBT 映画祭が開催されている。アジアでは、1989 年の「香港レズビアン & ゲイ映画祭」を筆頭に、1992 年からは、日本でも東京国際レズビアン & ゲイ映画祭がスタートし、2011 年に開始された「愛媛 LGBT 映画祭」など今では 6 つのクィア、LGBT 映画祭が毎年もしくは隔年で開催されている。クィアおよび LGBT 映画祭はときにアイデンティティ・ベースの映画祭とカテゴリーされるように、観客と一種特別な関係で結ばれている。というのも、これらの映画祭は、性的マイノリティ（に加えて、既存のジェンダー・セクシュアリティのカテゴリーに違和感を持っていたり、揺れていたりする人々）が、アイデンティティについて考え、またコミュニティ生成の場に遭遇するという稀有な機会を提供するからである。クィアおよび LGBT 映画祭が文化的イベントであると同時に、アクティヴィズムであるとするならば、それは、アイデンティティをめぐる折衝が起こる場であると同時に、新たな共同

性あるいはコミュニティへの希求を表現するからではないだろうか。クィアおよび LGBT 映画祭は、ときに社会に居場所を見出だせなかったり、不可視の存在となりがちな性的マイノリティたちが場所と時間、そして情動的経験を共有する祝祭的時空間である。すなわち、これらの映画祭は、映画を媒介としてコミュニティを生成するための社会的実践なのである。ここで重要なのは、コミュニティを所与のものとししない視座であり、また性的マイノリティの連帯の困難に対する認識である。現実の性的マイノリティは、必ずしも社会で可視化されることを望まない（または望めない）場合もあり、またジェンダーや人種/エスニシティ、社会階層といった多様な要素によって分断されてもいる。だが、こうした差異を内包しつつも、連帯の可能性を育み、コミュニティ生成を呼び込むのがクィア・LGBT 映画祭の役割ではないだろうか。従って本研究の第一の目的は、この多様性に満ちた性的マイノリティが、どのように映画祭を用いて、コミュニティを構築していくのかを検証することにあつた。申請者は、本研究に着手する以前から日本や韓国でクィア・LGBT 映画祭、およびクィア映画特集を有する女性映画祭に参加し、東アジアの枠組みでこれらの映画祭について研究する必要性を痛感してきた。そこで、第二の目的として本研究は、日本、韓国、台湾といった東アジアの性的マイノリティが映画祭を通して、国境を超えたネットワークを構築し、連帯していく可能性を探ることを目指した。そして、最終的には、本研究で得られた研究成果をクィア、および LGBT 映画祭およびコミュニティに還元したいと考えた。具体的には最終年度に、映画祭関係者やコミュニティのアクティヴィスト、地域のサポーターを招いてシンポジウムを開催し、性的マイノリティのコミュニティと地域を繋ぐための議論を深め、より意義のある映画祭開催のための戦

略を共に考えていくことを目標に掲げた。また本研究の成果を海外の学会等で積極的に発表し、クィア・LGBT映画祭研究に寄与するとともに、研究の成果を報告書にまとめ、映画祭関係者やコミュニティに配布する計画であった。

3. 研究の方法

文化的なイベントであるだけでなく、社会的、政治的实践でもある映画祭に関する研究はまだ始まったばかりであり、方法論や、理論的枠組みに関しては、まだ模索中の段階である。従来の映画研究のアプローチからは、作家論や、テキスト分析、また観客論に関する知見を借り、映画祭で上映された作品を考察し、観客についての分析の土台とした。また、そうした映画・メディア研究の方法に加え、インタビューやアンケートといった社会的な調査も取り入れ、映画祭という複合的な事象の把握を試みた。

また、日本を含めた東アジアという枠組みでクィアおよびLGBT映画祭を取り上げた本研究の性質上、クィア映画理論、批評を援用した。また、とりわけ日本の映画祭では、地方都市における映画祭の役割に大きな関心を寄せ、地域社会（地方自治体、商店街など）との連携や、地方在住のLGBT当事者が抱える固有の困難や問題について考察した。

映画祭という一回性の出来事において立ち現れ、コミュニティ生成の契機としてはたらく「情動」をどのように理論化、概念化していけるかという点は本研究の最大のチャレンジとなった。そのためにも、申請者はできるだけ多くの映画祭に参加し、現場の時間的空間的経を共有することによって、可視化も数値化もされえない「情動」について丁寧に考察しようと試みた。

4. 研究成果

申請者はこれまで、日本の視覚文化における

クィアな表象実践についての研究を行ってきたが、その過程において、非規範的なセクシュアリティを示唆する「クィア」が、日本ではアカデミズムやジャーナリズムだけでなく、映画文化を通じて受容されたことがわかった。アカデミズムにおいては、1996年前後に『現代思想』や『ユリイカ』といった雑誌が特集を組み、クィア・スタディーズやゲイ・レズビアン・スタディーズが学問として認識され始めてはいた。だがアカデミックな専門用語としてではなく、「文化的な力」としてクィアやLGBTが登場してくるのは、同じ時期、映画批評（石原郁子『董色の映画祭』）や、海外のクィア・LGBT映画祭を紹介する記事（『DICE 特集：レズビアン&ゲイフィルム・フェスティバル』）などを通してであった。このように日本においては、クィアやLGBTといった概念、用語が映画祭というイベントを通して拡がりを獲得していったことを念頭におきながら、本研究は、その後のクィア・LGBT映画祭の増加に注目し、それらが当初の「当事者による当事者のための当事者についての」映画祭から、非当事者を含む映画祭へと変化した経緯を明らかにし、またその変化によって、映画祭がオルタナティブなコミュニティを生成する原動力となる可能性について検証することを目指した。

また、本研究を実施中に、渋谷区や世田谷区などの同性パートナーシップ登録制度などにより、日本国内のLGBTアクティビティズムは、大きな転換期を迎え、メディアに置いてこれまでにないかたちで可視化されるなど、コミュニティ生成に新たな側面が生じた。今後の展望としては、2015年以降の日本のクィア・LGBTのコミュニティ構築のあり方を十分に踏まえた上で、映画祭の役割を今後再考する必要があるだろう。

本研究の具体的な成果としては、以下(5)に記すように、雑誌論文の執筆や、学会、セミナーや講演会での報告、講義、講演を挙げ

ておくが、最終年度には、当初の計画通り、国内外のクィア・LGBT映画祭運営者、プログラマー、研究者を招いて国際ワークショップを開催することができた。地方都市におけるクィア・LGBT映画祭の現状、当事者コミュニティとの関係、運営上の戦略や継続的開催の困難などについて率直な議論を交わし、研究成果を社会に還元することも、わずかながらでもできたのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

1. 菅野優香「クィア・LGBT映画祭試論」『現代思想』、査読無、43巻、2015、202-209
2. 菅野優香「ゴシップ、あるいはラディカルな知」『ユリイカ』、査読無、47巻、2015、176-183
3. 菅野優香「ニュー・クィア・シネマ、あるいは歴史をやり直すということ」、『私たちの21世紀』、査読無、76巻、2013、32-35

[学会発表](計 3 件)

1. Yuka Kanno, Queer Film Festivals: What Can Cinema Do?, Kinema Club, June 6, 2015. Frankfurt, Germany.
2. Yuka Kanno, Queer Connectivity: Film Culture and Festivals in Japan, Representations and Self-Representations Conference, March 20, 2015, Vienna, Austria.
3. Yuka Kanno, Distance in Crisis: Transqueer Movements and the Privilege of Distance, Crossroads in Cultural Studies Conference, July 3, 2014, Tampere, Finland.

[図書](計 3 件)

1. Yuka Kanno, British Film Institute, *The Japanese Cinema Book*, Forthcoming (2016), 30
2. 菅野優香 他、東京大学出版会、人種神話を解体する(III)、2016刊行予定、20

3. 菅野優香 他、京都大学学術出版会、セクシュアリティの戦後史、2014、19

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅野 優香 (Yuka Kanno)

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・准教授

研究者番号：30623756